

## わがまち歴史散歩

## 計算がいっぱい。延宝7年「池田庄検地帳」

## ○「検地帳」の記載

延宝7年(1679)「池田庄検地帳」は用紙を二つ折りして、前回確認したような大きさとし、基本的には片面に3筆ずつ記載していきます。このページの左端に紹介するのは厚い検地帳の2枚目、片面に3筆あるうちの2筆分の記録を写し取ったものです。

1筆目を読んでみましょう。まず「古検」とあります。これは、文禄3年(1594)の検地という意味で、地目は屋敷、面積は28歩(坪)だったという記録です。それが今度の検地では地目は同じく屋敷、一辺の長さが6間3尺3寸と3間4尺8寸、面積は25歩(坪)とされました。そして、この土地の年貢負担者は東町(東本町)の喜右衛門、その分米高(年貢持分)は1斗、ただし、1

反当たりの年貢持分は1石2斗です。ちなみに、田畑と同様、屋敷地にも年貢がかかっています。

次の土地についても同じように読んでいきます。すなわちここでも、「古検」では地目は屋敷で2畝10歩、これが今度の検地では、地目は屋敷のまま。面積は14間4尺2寸と3間3寸で1畝15歩(坪)、分米高は1斗8升、年貢負担者は立石の長右衛門だと読めます。

延宝7年の検地帳の記載はこんな感じで、全部で4千4百筆以上、丁寧な文字できっちり書き上げられています。

○数字の算出はどうやって  
ところで、これらいろいろな数



古検屋敷式拾八歩	六間三尺三寸	式拾五歩	東町
一、屋敷	参間四尺八寸	但老石式斗代	喜右衛門
古検屋敷式畝拾歩	拾四間四尺二寸	壹畝拾五歩	立石
一、屋敷	参間三寸	長右衛門	但老石式斗代
此分米壹斗八升			

▲面積：1町=10反=100畝 $\approx$ 10,000 $\text{m}^2$   
=1ha。1畝=30歩(坪) 1歩(坪)=3.3 $\text{m}^2$   
体積：1石=10斗=100升=1,000合=180 $\text{kg}$ 。  
米1石 $\approx$ 150kg  
長さ：1間=6尺=60寸 $\approx$ 1.82m

字はどうやって書き上げられていったのでしょうか。

「屋敷」の文字の下、2行にわたって書かれた6間3尺3寸などの数字は奥行きと間口の長さ。これは実測した数字でしょう。また、左下、「但老石式斗代」は調査に当たった検地役人が見積もります。ここは屋敷としても最良の土地だから1反当たり1石3斗にしておこう、といった感じでは、それ以外の数字はどうやって記入したのでしょうか。実はすべて計算の結果です。しかし、これは厄介な計算でした。

延宝検地のとき、1間は文禄のときの6尺3寸から6尺に簡略化されましたが、それでも1間は6尺、1尺は10寸です。また1町の面積は10反、1反は10畝、1畝は30歩(坪)です。このように長さも面積も途中で位取りの基準が変わっているのです。面積を出し、分米高を出すにはこの位取りの違いを組み込んでおかねばなりません。たとえば、上の例文、6間3尺3寸と3間4尺8寸を掛けて面積を出すときには、10進法が効く尺を基準にするとして、近代人なら以下のように

計算します。すなわち、6間3尺3寸 $\parallel$ (6 $\times$ 6)尺+3 $\cdot$ 3尺 $\parallel$ 39 $\cdot$ 3尺、同じく3間4尺8寸は22 $\cdot$ 8尺と換算します。次にこれらを掛けて、896 $\cdot$ 04平方尺と出す。1歩(坪) $\parallel$ 36平方尺だから、896 $\cdot$ 04 $\div$ 36で答えは24 $\cdot$ 89歩。これを概略表記すれば例文通り25歩という数字が出てきます。

しかし、これは面倒だし、間違いやすいですね。しかも、つづいて、1反当たりの平均取れ高と面積をもとに分米高を求めねばなりません。これは比例式の問題ですが、ここでも10進法だけではありません。当時の人たちはこれとは違うやり方をなにか知っていたのでしょうか。試みに、検地帳の数字はいくつか検算しましたが、答えはすべて合いました。

そろばんしかない時代、人びとは大変な集中力をもってこの事業をやり遂げたのです。しかも、「検地帳」の最終ページでは、前号で見たようにいろいろな集計までやっています。驚くべきことではないでしょうか。

(市史編纂委員会委員長・小田康徳)  
◆問い合わせは生涯学習推進課市史編纂 ☎754・6674